

聖書箇所：ルカの福音書9章10～17節

説教題：分け与えてくださる主

1 多くの群衆が来た

イエスはあるとき弟子たちの中から後に使徒と呼ばれる十二人を選び出し、力と権威を授け、村や町に送り出します。十二人にとっては初めての経験でしたから最初はどんな様子であったのかと想像します。まるで漫画のようですが、「悪霊よ、出て行け」と命じる声は、自信がなくて、弱々しいものだったかもしれません。それでも、悪霊はおびえながら追い出されていきました。こうなれば向かうところ敵なしです。使徒たちは大きな自信をつけて旅から帰ってきました。

そのようなことがあってから、イエスは使徒たちを連れてベツサイダという町にひそかに退かれます。人々に知られないようにお忍びでということでした。しかしどこからか聞きつけたのか、人々はイエスの所へ押し寄せてきます。イエスはやって来た人々を拒むことどいたしません。いやむしろ喜んで迎え、神の国のみことばを語り、病気の者をいやしてまいります。

2 使徒たち

(1) 解散させてください

人々が集まってきたところは荒野です。店もなければ宿もない。そんなところへ男だけで五千人集まりました。全体では一万人はいたことになります。各自はお昼の弁当くらいは用意していたかもしれませんが、外で野宿するような準備などしていません。また、集まって来たのは健康な人たちばかりではあ

りません。多くの人たちは病気を抱えていました。イエスによっていやされはしましたが、なお十分な配慮は必要だったでしょう。そんな様子を見ていた弟子たちは、日が傾き初め、日没が近くなるのを見て、心配を募らせませす。このままでは大変なことになる。早く解散させなければ。しかしイエスのほうを見ると、みことばを語り続けて止める気配はありません。とうとう業を煮やしてこう言います。「この群衆を解散させてください。そして回りの村や部落にやって、宿をとらせ、何か食べることができるようにさせてください。私たちは、こんな人里離れたところにいるのですから。」

これに対し、イエスは意外なことを語ります。「あなたがたで、何か食べるものを上げなさい。」使徒たちは反論します。「私たちに五つのパンと二匹の魚のほか何もありません。」

ひそかにベツサイダに移動するつもりでしたから、余分な食料は用意していません。その事をイエスは知らないはずはありません。それなのに自分たちで用意しなさいと言われました。イエスのことばを聞いた使徒たちは、むっとします。「私たちが出かけに行って、この民全体のために食物を買うのでしょうか。」限られた人数と限られた時間の中ではそんなことは不可能です。

(2) すでに経験していながら

イエスは、使徒たちを困らせようとしたの

ではありません。本気なのです。できるとお考えになっていたのです。でも、いったいどのようにして用意できるのでしょうか。

その事を考えるヒントが9章3節のところにあります。イエスが十二人の使徒たちを町や村に遣わそうとしたとき、つぎのような注意を与えていました。「旅のために何も持って行かないようにしなさい。杖も、袋も、パンも、金も。また下着も、二枚は、いりません。」

金は持つな、とあります。金がなければ食べ物を手に入れることはほとんど難しい。宿に泊まることもできない。

私の経験になりますが、学生時代に自転車で北海道をまわったことがあります。最後の日、財布には百円玉が数枚しか残っていませんでした。旅をしていてお金がないということがいかに心細いものでみじめなものであるのか、その時実感しました。

使徒たちはどうなったか。旅先で、食べることはもちろん、泊まる宿のこと、着物のことで何一つ困ることはありませんでした。全部満たされました。もちろん天から必要なものが自動的に降ってきたということではありません。旅の先々で、人々が快く使徒たちを迎え、進んで宿を提供し、喜びながら食事や必要なものいっさいを提供してくれたということでしょう。使徒たちの目には、自分たちが十分に満たされたのは、人の好意や親切のおかげだと見えました。

本当はそうではありません。目には見えなけれど、使徒たちの旅の先々で必要なものいっさいを満たしてくださっていたのはイエスご自身であったのです。イエスが十二人の使徒たちに力と権威を授けられたとき、ただ病気を直す力ですよ、悪霊を追い出す権威

ですよという何かエネルギーのようなものを与えたわけではありません。もっと豊かなもの、もっとすばらしい恵みを与えてくださっていました。イエスは、力と権威とを使徒たちに授けたとき、必要のいっさいを完全に満たすという約束も与えてくださっていたのでした。

(3)ゆだねられた力と権威の大きさを知らない

使徒たちがイエスのところに来て旅の報告をするのですが、すべて必要なものいっさいが十分に与えられたことを感謝して報告をした者はだれもいませんでした。こんな病気が人がいやされた。悪霊につかれてひどい状態の人から悪霊が追い出され、健康になった。数々の奇蹟のことばかりを興奮して語るだけでした。

イエスが「あなたがたで、何か食べるものを上げなさい」と言われたのは冗談でもないし、困らせようということでもない。実は彼らはやろうと思えばできたのです。使徒たちには、すでにそれができる力が与えられていたのに、そのことにだれも気づかないままでした。

3 イエス

(1) 五つのパンと二匹の魚を取る

このあとイエスは、ご自身の手でパンを与えていきます。大きく分けて三つのことがあるように思います。

まず一つ目。イエスは五つのパンと二匹の魚を手に取ります。考えると不思議なことです。イエスは、みことばをお語りになるだけで必要なものを与えることができるお方です。わずかなパンと魚などなくてもよいはず

です。それなのに五つのパンと二匹の魚をあえて用いる意味は何でしょう。

イエスはこんなふうに言われているように思うのです。「あなたの持っているものをわたしに与えてください。あなたが持っているものはわずかに見えるけれど、本当に豊かですからそれで十分です。わたしは喜んであなたの持っているものを使わせていただきます。」

イエスをご自分お一人ですべてのことがおできになる方なのに、そのようにはされません。何をすることも私たちと一緒にであることを大切にされます。その私たちは何を持っていますか。何ができますか。ほとんど何もありません。何もできません。そうであっても大丈夫。私たちの手にあるごくわずかものにもイエスは目を留め、喜びと感じてくださいます。

(2) 天を見上げる

次に二つ目。イエスは天を見上げます。天には父なる神がおられます。なぜその天の父を見上げるのでしょうか。ヨハネの福音書6章38,39節にこうあります。「わたしが天から下って来たのは、自分のところを行うためではなく、わたしを遣わした方のみところを行うためです。わたしを遣わした方のみところは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。」

イエスはいつも、すべて父なる神のみところを実現するために、その目的のためにあらゆることをなさろうとします。父なる神のみところとは何か。ひとこと言えば、私たちを救い出し、天の御国へと招くことにありま

す。

そうしますと、ここで行われていることは、ただお腹が空いたのでパンを与えました、というようなことではなくなります。もっと深いのです。イエスのところに来た五千人の群衆、そして私たちの救いと命に関わる大切なことがここで行われていました。

(3) 祝福して裂き、与えられた

それはどのようにして行われたか。それが三つ目のことになります。「それらを祝福して裂き、群衆に配るように弟子たちに与えられた。」。

聖書では、「イエスがパンを祝福して裂く」ことに特別な意味を与えています。私たちが毎月おこなっている聖餐式の場面でも読まれます。「主イエスは、渡される夜、パンを取り、感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。これを覚えて、これをおこないなさい。」

この場面は、あきらかにこの聖餐のことと関係があります。

4 ご自分を分け与えてくださる主

イエスは、五つのパンと二匹の魚から五千人の群衆の飢えを満たすパンを分け与えてくださいました。そのパンはいったいどこから来たのでしょうか。私たちははっきりと覚えなければなりません。イエスは、ご自分のからだを裂いて、そのからだを私たちに分け与えてくださったのです。

この方は神なのでからだ裂かれても痛みを感じなかったのですか。そんなことはありません。この方は人となられたのです。人としてからだ裂かれるとき、激しい痛みを

覚えました。

この場面ではまだ実際にからだは裂かれていないから痛みを感じていないと思いますか。確かにまだ裂かれてはいません。でも、人々の罪を赦すために与えられているパンです。罪を赦すために、ひとりひとりの罪を背負うことになる。罪のない方が罪を背負う。それだけでもどれほどの激しい痛みであったのか、私たちは思うべきではないでしょうか。

イエスは、私たちの手にあるごくわずかなものを「それで十分だ。わたしに与えてください」と言われ、救いのみわざに用いようとされます。私には何も無い。私は何もできない。そんなことは思う必要はありません。もうすでに十分に与えられている。小さなことに見えてもイエスの目には豊かに見えています。

イエスはその小さなものを祝福され、ご自分のみからだを裂き、神の救いの恵みにあずかるようにと、喜んで分け与えてくださいます。主の御名をあがめます。